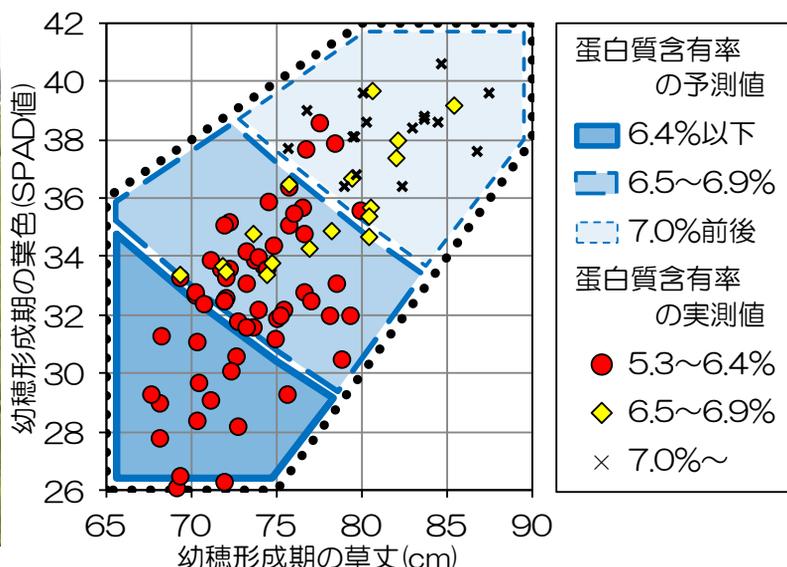


水稻「きぬむすめ」の 生育診断に基づく良食味米生産技術



施肥を変えて栽培し生育状態に差がある「きぬむすめ」



「きぬむすめ」の幼穂形成期の生育から予測される蛋白質含有率

開発のねらい

2014年に本県の奨励品種に採用された水稻品種「きぬむすめ」について、施肥管理方法と生育及び食味の関係を把握し、良食味米を生産するための方法を明らかにしました。

新技術の概要

- 「きぬむすめ」で速効性肥料を基肥と穂肥に分けて施用する場合、食味や収量と関係の強い幼穂形成期の草丈(cm)や葉色(SPAD値)を用いて、生育診断を行うことができます。
- 草丈が高く、葉色が濃いほど、収量は多くなりますが、食味は低下します。
- 食味を重視した栽培を行う場合、基肥は慣行の5～8割程度に控え、穂肥は窒素成分2kg/10a以内で生育に応じて調整します。

活用場面

県では「きぬむすめ」の食味を重視した生産拡大を推進しています。本技術を活用すると、生育診断に基づき施肥量の調整が可能となるため、高品質な良食味米が安定して生産できるようになります。